

# フランツ・ファノンとニグロの身体

— 「黒人の生体験」再読 —

中村隆之

## I. 序：ファノン研究の動向と問題の所在

フランツ・ファノンは〈時代〉を疾走した。1925年、フランスの旧植民地マルティニック島に生まれ、留学先のフランス本土で精神医学を修め、1953年、アルジェリアのブリダ＝ジョアンヴィルの精神病院に赴任後、同地の民族解放闘争に加担。その後、民族解放戦線(通称FLN)のスポークスマンとして、1961年のその死まで、アルジェリア独立戦争に全面的に身を投じた。

ファノンは、36年というその短い生涯のうちに、三つの著作と死後出版の政治論集を一つ残している。『黒い皮膚・白い仮面』(1952年)、『アルジェリア革命第五年』(1959年、これは後に『革命の社会学』と改題される)、『地に呪われた者』(1961年)、『アフリカ革命に向けて』(1964年)がそれである。これらのうち、1960年代から70年代にかけて、解放運動の実践に直結する諸問題を含んだ著作として世界的に受容されたのが、遺著『地に呪われた者』であった。

日本では、1960年代後半のみならず書房からのファノン著作集の翻訳刊行に伴い、彼の著作は『地に呪われた者』を中心に当時の読者に熱心に読まれた。こうした同時代的な受容の道を切り開いたのは、ジャン＝ポール・サルトルに私淑するフランス文学者たちであり、とりわけ、ファノンの訳者として、彼の暴力論を中心とした紹介評論を書き、読者のための道標の役割を果たした鈴木道彦と海老坂武である。鈴木は「黒く開化民」と暴力」と「橋をわがものに

する思想」(鈴木[1969a], [1969b])や、講談社の人類の知的遺産シリーズの一冊として刊行された『フランツ・ファノン』に結実する海老坂[1981]の所説は、ファノンの抱えた問題に同時代人として取り組むというその読みの方向性において、単なる紹介を超えた優れた批評として、今日でも見落とすことのできない視点を含んでいる。

しかし、海老坂[1984: 171]が指摘するように、ファノンへの国際的関心は70年代中頃から急速に薄れてゆく。ファノン再評価の動きが高まるのは1980年代以降である。1982年には、ファノンの20周年を記念し、彼の故郷マルティニックの主都フォール＝ド＝フランスで「フランツ・ファノン国際記念メモリアル」(André[1984])が、1984年には、コンゴ人民共和国(現コンゴ共和国)の首都ブラザヴィルで国際コロック「フランツ・ファノンの今日性」(Dacy[1986])がそれぞれ開催された(前者については海老坂[1986: 46-79]に詳しい)。フランス旧植民地で行われたこの二つの国際コロックの重要性も忘れてはならないが、ファノン再評価の動きを国際的に広めたのは、むしろ文化研究やポストコロニアル研究と連係した英米圏でのファノン研究であり、その嚆矢は『黒い皮膚・白い仮面』英訳ブルート版の序として書かれたホミ・バーバ「ファノンを想起すること：自己、心理、植民地状況」(1986年)であった(Haddour[2005: 137])。

バーバの序は、ファノンの精神分析的な叙述と彼の叙述の揺らぎに着目しながら、植民地的

主体の自己同一化の問題を同書に読み込むことで、ファノンの新たな読解の可能性を切り開いたものである(Bhabha[1999=1992])。第三世界主義者、革命主義者として読まれてきた従来のファノン像と一線を画し、『黒い皮膚・白い仮面』からの再読解を促したこの新たな研究の方向性のもとに、ファノンは現在に至るまで様々な場面で参照され、論じられている。なかでもアレサンドリーニとギブソンがそれぞれ編んだ二つの論集は、90年代の英米圏のファノン論の動向を知る上で大変有益である(Alessandrini[1999], Gibson[1999])。

日本でもまた英米圏における再評価の動きを受けて、ファノンの著作は、90年代にポストコロニアリズムの文脈において再び論じられるようになる(崎山[1995], 富山[1996], 管[2004], 本橋[2005])。とりわけ崎山と富山の論考は、アイデンティティ論を中心とするバーバ以降のファノン受容に対する一定の違和から、むしろ『地に呪われた者』における暴力の問題を再考することを目指している点で注目される。また、日本アジア・アフリカ作家会議の刊行する季刊誌『aala』の最終号(1997年)の特集号が暴力論であり、それ故、ファノンが再びこの文脈において捉え直されて久しいことも指摘しておきたい(鶴飼・富山・崎山[1997], 平井[1997])。

以上に見たファノン研究には大別して二つの方向性があると言える。すなわち『地に呪われた者』においてその暴力論を考察する方向性と、『黒い皮膚・白い仮面』を中心にアイデンティティの問題を取り上げる方向性である。このように、重視する著作に応じて論者の問題の所在が変化するのは、ファノンの人生を分かつアルジェリアへの赴任(とりわけ革命への参画)に伴う彼の問題関心の変化に対応している。

したがって、ファノンをその総体において捉えようとする場合、問題になるのはこの〈断絶〉である。『アルジェリア革命第五年』から『ア

フリカ革命に向けて』までの著作、すなわちブリダ=ジョアンヴィル精神病院赴任後に書かれた著作には明らかな連続性が見出せるのに対し、『黒い皮膚・白い仮面』だけがある種これらから断絶している。この〈断絶〉のために、ファノン研究もまた二つの異なる方向性を有すると言えよう。

本稿は、この二つの方向性のうち、主に『黒い皮膚・白い仮面』、とりわけその第五章「黒人の生体験」に重きを置いている。鈴木[1969b: 196]の的確な指摘にあるように「ファノンにおいてはすべてがその黒い肌から出発して」おり「彼は終生その肌の色を忘れなかったに違いない」。第五章は、後に詳しく見るように、ファノンの黒い肌との葛藤を記述した、彼の原点にあたる文章である。本稿の目的は、この章の読解を通じて、ファノンにおける黒い身体の問題を考察することにある。

この考察は『黒い皮膚・白い仮面』以降の彼の著作まで及ぶ。黒い肌をめぐる記述は『黒い皮膚・白い仮面』以降、きわめて断片的にしか見出せず、しかもその記述はまったく客観的である。第五章における彼の黒い肌をめぐる葛藤はあたかもアルジェリア時代のファノンにおいては解決済みであるかのようだ。しかしこの問題は本当に彼において解決されていたのだろうか。『アルジェリア革命第五年』以降の著作を取り上げることで、筆者が問いたいのはこの点である。

この研究を通して、筆者はさらに『黒い皮膚・白い仮面』とアルジェリアへの赴任以降の著作との断絶は表面的なものであり、決定的な断絶はむしろ『黒い皮膚・白い仮面』と「黒人の生体験」にあることを示すつもりである。

## II. 原点としての生体験

『黒い皮膚・白い仮面』(以下『黒い皮膚』と略記)は、アンティーユ人(les Antillais)の心理

